

南インド・マドラスにおける Palm Leaf Manuscripts の作成方法について

三 保 サト子 ・ 三 保 忠 夫
(国文教室)

On the Process of the Making the Palm Leaf
Manuscripts in Madras, South India

Satoko MIHO , Tadao MIHO

キーワード：南インド，マドラス，パームリーフ写本，貝葉

Abstract : The present description is an on-the-spot investigation into the process
of the making the Palm Leaf Manuscripts in Madras, South India.

はじめに

ヒトの英知の所産は、洋の東西を問わず、“書く”ということによって、蓄積され、更なる発展を遂げてきた。“書く”ことは、従って、文化・文明の発展と継承とを支える強力な利器そのものであったといえてよい。

書くこと一即ち、文字、文字の書き方、書く素材、等々は、また、時代、地域、民族・文化などによって大小の差異がある。文字にしても素材にしても、今日、滅びてしまってその存在すら窺えないようなケースも多いが、今ならまだ記録できそうなケースもある。もし、状況が許せば、我々は、それらを何らかの形で記録しておかねばならない。これをもって民族・文化の研究のための基本的資料とし、後代に備えておく必要があるのである。

さて、南インドのマドラス (Madras) に本部を

おく Institute of Asian Studies (アジア文化研究所)¹⁾は、インドの各地に伝えられている Palm Leaf Manuscripts (貝葉文書・典籍) についての情報を収集し、タミル語貝葉文献の調査・研究・保存、²⁾また、その英語対訳出版等を精力的に行っている。筆者は、1996年12月9日(月)、10日(火)の両日、同研究所を訪問し、所長彦坂周博士、Director の G. John Samuel 博士、Manuscriptology 部局長の P. Subramaniam 博士、Pulavar B. Kannaiyan 氏、V. Ganesan 氏、Kalpana Ganesh 女史、その他、多くのスタッフの御指導をいただき、Palm Leaf Manuscripts についての調査を行うことができた。以下には、その概要を記し、アジアにおける書記素材研究の一端としたい。併せて、同研究所スタッフ各位の学恩に報いることができれば、幸いである。

1 南インドのPalm Leaf Manuscripts

このInstitute of Asian Studiesは、Manuscriptology, Folklore, タミル語, カンナダ語, テルグ語等の専門部局, コンピューター室, セミナー室, 図書室等々を備えた総合的な研究・教育機関であり, その主な業務はタミル語の写本 (Palm Leaf Manuscripts) の収集, 保護, Manuscriptology を中心とする専門家の人材育成, 関係情報のコンピューター処理, マイクロフィルム化, 解説目録の作成, 写本の英語訳本の公刊等である。

タミル語によるPalm Leaf Manuscriptsは, インドの各地, 各所に所蔵されていて, Samuel博士の調査によれば, 総計83,032点が数えられるという³⁾。

これらの写本については, 同研究所発行の“A Descriptive Catalogue of Palm-leaf Manuscripts in Tamil” (Vol. I, Part I, 1990年, 以下続刊) に詳しい。

この目録では, I タイトル (Roman script and Tamil), 著者, 注釈状況, 文字, 作品成立年代, 読解の可否, 葉数, 行数, 写本のサイズ, 作品の完否, 保存状態, 欠損状況, 所蔵者, copying年次とその人物, 作品構成・形態, また, II その公刊状況, 更に, III 作品の主題, 作品の様式, 言語の特色, 歴史的／社会的／文学的重要性, 概要／要約, 作品の首部・尾部の紹介 (引用), 等々にわたっての情報が細かく記述されている。

只ひとつ, このままではヤシの葉の種類 (パルミラヤシ・タリポットヤシ等) がわからない点が残念であるが, あるいは, それが自明のことであれば, 書く必要もなかったのかもしれない。

研究所にも, タミル語のPalm Leaf Manuscriptsが, 1,400点ほど保管されている。これらは, 図書分類番号に従い, 中を10段に仕切った書架8架に納められている。[図版A]

脇には, また, 観音開きのFumigation Chamberが置かれている。幅152センチ, 高さ117センチ, 足高20.5センチの燻蒸消毒庫で, 中は四段に仕切られている。底部の片隅にThymolチモール溶液を入れたピーカーを置き, これをガラスの小窓の下 (庫外) からライトで炙る。Thymolは揮発し, 庫内に立ちこめる。傷んでいる写本は, 一週間交替でここに入れる。

こうした手写による書物, 即ち, 写本は, その素

材 (palm leaf) からして, 約200~300年くらいの寿命といわれている。写本は, この間に転写され, 次世代へ受け継がれて行くことになる。

2 典籍・文書の内容・形態

Palm Leafによる書き物には, 大きく分けて2種類ある。一つは, 典籍, 即ち, 写本類であり, 一つは, 文書類である。いずれの場合でも, 文字 (タミル語) は左から右へ書いていく。

写本の内容は, 歴史, 文学, 詩, 物語, 宗教, 民俗学, 数学, 占星術, 医薬関係など, 多岐にわたっている。[図版D, E]

写本の外形は, 一定しない。大体, 大型本なら80センチくらい, 中型本なら47~58センチくらい, あるいは, 35~44センチくらい, 小型本なら12~20センチくらいの, およそ, 三様ほどに分たれようか。就中, 多を占めるのは, その中型本のグループであり, 他二者は, 至って少ない。葉の幅も, 5センチから4センチ, 3.5センチ, あるいは, 3センチ, 2.5センチ, 2センチなどいろいろである。この点, 上記の目録を整理・分類すれば, きちんとした数字が得られるはずである。

葉の綴じ穴は, 左寄りに, ほとんど一穴であるが (一穴本), まれに大型本に二穴本がある。

綴じ紐 (紐帯) は, 長い。小型本でも約130センチもある。紐の巻き方は, 一穴の中型本を例にとれば, こうである。

まず, ポッチ (鈕頭) の付いた紐を, 前表紙の綴じ穴の上から, 写本の本体を貫いて後表紙の下まで通し, これを左方の端に向かって大きく1回巻く。右にとって返して綴じ穴までに2回巻き (*), 綴じ穴を大きく越えて3回目を巻く。更に, 右の端に向かって1回巻き, これを左へにとって返して3回巻く。この3回目以前表紙の綴じ穴のボタンに達するが, 後表紙の綴じ穴を越えるようにして1回, 次いで, 前表紙の綴じ穴を逆 (右方) に越えて1回巻く。これが上に戻って来たところでポッチの左際に位置する*部をくぐらせ, ポッチに結ぶ。

いつでもこうであるとは限らないであろうが, これが大方のところと了解すればよからう。

紐は, その穴の割合には比較的細い。用いられる紐に赤色が多いのは, たまたま保全・補修に当たった同研究所員の嗜好によるとのことであった。

以上は, いわゆる書物を写した写本の形態である

が、この他、注意されるものに次の形態がある。即ち、Palm Leaf による家の Documents, 村や寺院の Accounts, また、書簡の類であり、これらは、いわゆる、文書類（古文書）として扱われるものである。

家の Documents 類は、パルミラヤシの小葉の一枚物を用いる。本ではなく、ノートであるから、その葉の自然の形（原形）、即ち、弓形の80センチから1メートル余の長さ、幅2.5センチくらいのもの、3枚、あるいは、5～6枚を用い、各葉5行くらいに書く。墨のペースト類は入れない。

村や寺院の Accounts 類は、大体、1年たてば不要とされ、破棄される。これも non-cut, non-boiled の自然の葉形の、80センチ前後長のものが用いられる。節葉の端の葉脈を切除せず、これをもそのままに用いる。葉脈を留め、葉を二枚重ねた状態で使用するわけであるから、強度が保たれる。一葉を数区画に分け、一番左のそれにタイトル、第二区画以下に記事を書いていくケースが見られる。左端から20センチくらいのところに一穴がある。

そうした Documents 類としては、葉の角を切除した50センチ余の一枚物もある。状況に即して、更には、様々なものがあったことと推測される。

書簡の類も、50センチくらいの、あるいは、やや長めのヤシの葉に書き記される。1枚で済めば1枚、2枚を要するなら2枚、といった形で書かれ、1枚目から順次、径5センチほどの輪の形に丸めていく。丸められたヤシの葉の最後の末端部は、その葉から切り離された葉脈を紐として本体に結び止められる。

結び止める方法は、こうである。まず、そのヤシの葉の末端部の上面に紐（葉脈）の初端を置いて起点とする。次いで、輪をくぐらせ、その初端部と交差するように、紐を二重に懸け回す。三重目に相当する形で出てきた紐の一端を二重になった紐の下をくぐらせ、締めて止める。紐の初端部と末端部とは、きちんと並行し、ヤシの葉の末端部と同じく、外方向を向く。

その結び目は、必要に応じ、濃赤色の Araku で封印する。Araku とはタミル語であり、封泥専用の固形物をいう。木に棲む蚕に似た虫が吐き出すネット（糸）から作った物質だといい、普通は、ちょうど丸いチョークを心もち太くしたような形に固められ、市販されている。石のように固いが、蠟燭の炎で炙るとガム状に溶ける。これを、その結び目に塗

り付ける。間を置かず、本人（発信人）のイニシャル等を刻んだ指輪の頭（印章）を押しつけ、押印する。熱い Araku は冷え、固まり、封印は完了する。指輪のその面に、水、あるいは、水がなければ、つばでもつけて押印すれば、鮮明な刻印が得られる。受信者は、封印を確認して開封する。この折、封泥は、初めて破壊される。Araku の封泥は丈夫で、ために、送信時の少々のショックや雨によって、これが外れることはない。[図版 F]

ところで、スリランカやタイでは、大きな図形、マジカルな幾何学的図形や運勢図などを書く時、ヤシの葉を横に綴り合わせて用いることがあった。だが、この南インドでは、こうした用法はないという。一枚物に小さく書くか、各個の葉に部分を分けて書くしかない。マンダラや医術等に用いる身体図なども同様で、同じ大きさの葉を使って順番に書き、これを順番に見ていくのだとされる。あるいは、タリポットヤシは葉面が広いので、必要に応じてこれを用いる、場合によっては、これを縦にも用いるとのことである。

スリランカで見られた折本の形態も、ここにはないようである。

3 書記用のヤシの種類

この南インドでは、広くパルミラヤシを用い、タリポットヤシ（コリファヤシ）は、あまり用いないようである。この点、注意される。

パルミラヤシは、学名 *Borassus Flabellifer*. L. で、英名 Palmyra palm, 邦名オウギヤシ、ウチワヤシという。カントリー・パーム・リーフとも説明されるが、タミル語で、パネイマラム *Panai maram* といい、その雌株は、また、*Nunkup panai* ともいう。英語との対応は、次のようである。

Panai → Palmyra-Palm

maram → tree

Nunkup → tender palmyra

この点につき、改めて、G. Ganesan 氏に質問し、確認したところ、次のような御指導をいただいた（'97.1.29, 原文英語）。〔下線部は誤記か〕

Palmyra-Palm につき、これは、普通 Tamil 語で *Panai maram* と称され、この雄株は、殊に、また、時に、*Nunkup panai* と称される。この（ヤシの）雄株だけが、Tamil 語で *nunku* と称される果実を着ける。*Nunku* は、tender（若い・未

成熟の) palmyra の果実の多汁質の種 (pulp kernel) のことである。果実のそれぞれは、三つの小室 (holes) を有し、ここには、tender coconut のパルプ (果汁) のような汁の多いパルプが含まれている。この種 (パルミラヤシ) の雄株の葉と、雌株の葉との間に差異はなく、この双方ともが、書記目的に使用され得る。

パルミラヤシは、成木で高さ15~30メートルに達し、樹冠部にタンポポの綿毛のような形に掌状扇形葉が茂る。根も地中深く伸び、条件の悪い砂地や痩せ地に強い。インド南部、マラバル海岸、マドラスやその近郊のあちこち、また、スリランカ北部、タイのサトゥン半島、アフリカ、その他にこのヤシが植えられている。この甘い樹液 (花序液) を煮詰めてヤシ砂糖を造るが、酒や酢も造ることができる。花房、実、種、葉、葉柄、幹、根の全てが利用でき、そのため、重要な産業植物とされる。葉を書記に用いるのも、実は、このヤシが、先ずは、そうして身近に利用されているところに付随してのことではなかろうか。

タリポットヤシ (コリファヤシ) は、学名 *Corypha umbraculifera*. L で、英名 Talipot palm という。タミル語で、*kūntar panai*, または、*Tālippanai* (*Sritālam*) という。巨大といってもよいほどの大きな葉を付けるヤシで、屋根葺材、日傘、その他に利用する。スリランカ、南インド、ジャワなどに産するといひ、スリランカのアルヴィハーラ寺 Aluviharaya Temple⁶⁾では、このヤシの葉 (幼葉) を写経に用いている。

上記の2種のヤシの葉を比較し、前掲の “A Descriptive Catalogue of Palm-leaf Manuscripts in Tamil” (Vol. I, Part I, 1990年) には、次のようにある (原文英文)。

ヤシの葉の二つの主な種類が、書記に用いられる。タリポットヤシ Talipot palm (*Corypha umbraculifera*) は、湿度の高い海岸沿いの地域に成長し、マドラスの北東海岸の原産 (native) である。パルミラヤシ palmyra palm (*Borassus flabellifer*) は、比較的乾燥した気候で成長し、ざらざらした (rough) きめの荒い (coarse) 葉を生じさせる。タリポットヤシの葉は、紙 (paper) に比べることができ、きめ細かく、滑らかで柔軟性を有している。タリポットヤシの葉は、滑らかで、吸収性があり、ブラシやペンにカーボンイン

クを着けて書記用に用いることができる。パルミラヤシの葉は、とても厚く、非常に硬い表面をしている。それらは、最初に鉄筆 (stylus) で刻みを付けられ、その後、その刻みはランプのスス (lamp black) で、— いくらかのものは、油が塗られ、インクは塗られないが、— 黒く色着けされる。 (P. xiii)

また、先の Samuel 博士には、次のような発言がある (注3文献、原文英文)。

多くの様々なヤシの木があるけれども、三種のヤシの木の葉が、インド、ネパール、スリランカ、ビルマ (ミャンマー)、タイ、インドネシア、カンボジアで使用された。それは、パルミラヤシ (palmyra palm), タリポットヤシ (tali pot palm), そして、コリファ・タリエラ (*Corypha taliera* Roxb.) である。南インドでは、二つのタイプだけが、即ち、パルミラヤシとタリポットヤシだけが使用された。パルミラヤシの葉は、タリポットヤシのそれに比較すれば、いくぶん (rather) 厚い。それらは、タリポットヤシの葉よりも、もっと虫の損害を受けやすいように見受けられる。タリポットヤシの葉の繊維は容易に損害を受けないし、もっと腐朽に抵抗力がある。その葉は、乾けば、柔らかな、明るい色をしていて、柔軟性がある。 (197頁)

ここには、パルミラヤシ、タリポットヤシの他に、コリファ・タリエラ *Corypha taliera* Roxb. が挙げられている。これは、ベンガルコリファヤシ (学名 *Corypha Taliera* Roxb.) のことらしい。ベンガルコリファヤシは、タリポットヤシ (コリファヤシ) の同属であり、やはり、貝葉写本に使用されたという (O.P. Agrawal, 'Conservation of Manuscripts and Paintings of South-east Asia', 1984, ButterWorths, P.26)。

パルミラヤシ、タリポットヤシの他に、特に、東南アジアでは、Lontar palm (*Corypha utan*) が問題となる⁷⁾。インドネシアのバリ島の Lontar (ロンタル) 文書は、Palmyra palm によるものかと思われるが、まだ、正確な確認ができない。

書記の素材とされるヤシの種類については、多くの先学に言及されたものがあるが、この内、ニッパヤシを書記に用いたとする説は誤りかも知れない。

4 ヤシの葉の調整方法

パルミラヤシの葉は、次のようにして調整され、書記者のもとに届けられる。

- ① ヤシの木から未成熟 (unripend) の葉を切り出す。
- ② 晴天の3, 4日, または, 1週間, 昼間だけ天日に干す (dry)。
- ③ 100度の湯で15分間, ゆがく。あるいは, その湯の上で15分間, 蒸す。この湯には, 何も混入しない。
- ④ 1週間ほど, 日中, 広げて干す。

これらの工程は, 単一人, あるいは, 事業所で行われるのではなく, 別途に数人の手を経ることになる。即ち, ①の担当者 (業者) や③のそれは異なっており, その都度, 代金の授受も行われる。

こうして書く (筆刻する) に適した柔軟な用紙を得ることができる。この状態の葉を, タミル語では *Ōlai* (オーラエ) という。

スリランカにおける仏典用の葉 *Ōla* (オーラ) の調整方法に比べると, これは至って簡便である。だが, それゆえに, 日常的によく用いられたもの, かつ, その現実的な書記生活をよく留めたものと推測されよう。

5 筆刻の方法

Ōlai の葉に文字 (タミル語) を書き刻むには, まず, その葉と *Stylus* (鉄筆), 及び, ハサミを用意する。

Stylus は, タミル語で *Elutani* という。骨, アイボリー, 竹などは用いず, すべて金属で作る。普通は, 鉄製であり, 銀製もある。王様は, 金 (製) を用いたともいう。先端を錐のように尖らせ, 絵もこれで描く。[図版B]

その形態には, 次のように四種類くらいがある。

- ① 一方を書記用に尖らせ, 他方に穿孔用の2本の角 (つの) を付したもの。これを *Kutavu* (*stylus*) という。*kutavu* とは, 穴を開ける (to make hole) の意である。全長27.1センチ。中ほど上部は, 方体となっている。2本の角は, 4ミリ弱の間隔で, 先端は鋭く尖っている。2本の角は, わずかに長さが異なる。一方を軸にして円弧が描けるようになっていて, これをクルクル回すことによって葉面に直径7.5ミリの円を切り抜くことができる。これが葉の綴じ穴となる。

② 一方を書記用に尖らせ, 他方をナイフ状に作ったもの。これを *Vār* (*stylus*) という。*vār* とは, そぐ, 削るの意で, リーフを切断するためのものである。全長28.9センチ。中ほど上部は, 方体となっている。

③ 一方を書記用に尖らせるが, 他方に2本の角もナイフも付けないもの。これを *Kuntu* (*stylus*) という。*buld*, 即ち, 書くためのものといい, 大字を書いたり, 初心者に使用させたりする。先端は, 鈍くなっているわけではなく, やはり, 鋭い。

④ 書記用に尖らせた部分と, ナイフ状に作った部分とが折り曲げ式になっているもの。これを *Mataku* (*stylus*) という。折り曲げる (to fold) ところからの名前である。

こうした *Stylus* は, 細かな字を書く先端部が生命である。鈍くなったり錆びたりすれば, その先端を研いで使用する。このための砥石は, 特別には, ない。手近の石や, 石材を用いた床など, 適当なもので磨く。

この他, 筆記のために用意するものとしては, 葉を磨く丸い, 直径3~4センチ, 5センチほどの小石, 貝, ガラス玉, また, 墨のペースト, 布巾などがある。

貝やガラス玉は, その表面が滑らかであるから使用するであろうが, たまたま見せてもらった小石は, 必ずしもそうではなく, 光沢もなければ滑らかさもなかった。むしろザラリとした手ざわりのものであったが, しかし, 葉面をゴシゴシこすれば, 葉面はならされて, やはり光沢を帯びてくるのであった。但し, こうした研磨材は, 見たところ, いつでも必ず使用するというわけではなさそうである。

また, 墨のペーストとはいっても, ここではこんなものだといって示されたのが *Eyetex*, つまり, まつげに塗る墨 *mascara* であった。普通は, せいぜい, *Lemongrass oil* を塗布する程度のものである。

さて, 写本の場合, 葉は, 磨いてなめしたり, あるいは, 指で4, 5回しごいたりした後, 必要な大きさに切り取って使いやすくする。角を落としておくと, 後に, ここが災いして葉を裂き割るといった事故を防ぐことができる。

葉は, まず, 左の掌の上に置くようにして, 下側から, 4, 5枚, 重ねて持つ。その葉束の左端部は, 左手人差し指の第三関節部の上あたりに位置させる。

左手親指で葉面を上から軽く抑え、同人差し指を上縁(小口部)に副えながら、他の指3本で下から支える。葉幅がなければ、小指は下縁からはみ出てしまうが、それでも中指・薬指・小指の3本は、そろえて伸ばしておかねばならない。これが、後で右手を支えることにもなる。葉束は、抑えた親指の力で軽く湾曲した形となる。[図版C]

Stylus(鉄筆)は、およそ長さ27~29センチほどのもので、この下部を右手に持つ。この方法は、折り込んだ親指の腹をStylusに副え、次に、3本の指を親指に巻き付けるようにして、握る。Stylusの先端部は、薬指の付け根から小指の付け根の外に出す。外に出るのは3,4センチほどである。

文字は細密で、筆刻には力を要する。この筆刻中、Stylusの先端は、左手の親指と人差し指(頭部辺)との中間あたりで働いており、この時、Stylusを握った右手の小指は、左手親指の爪の下端辺と第一関節あたりに、また、その下にのぞく小指に接触している。

Stylusを握った右手は、従って、我々がペンを握った場合よりも、多分に上向いた状態となっている。

座って書く場合は、左肘を左ももの付け根あたりに着ける。右肘は、ももに着けない。但し、脇に余裕があるわけではない。立って書くこともある。

書いて行く方法には、リーフを固定して手を動かして行くやり方と、リーフを動かして行くやり方の二様がある。

書き終わって後、葉を綴じるための穴(Hole)を開ける。これには、先のKutavu(stylus)が用いられる。数枚の葉の束の、穴を開けたい左端部を左手人差し指の上あたりに置き、親指で抑えながらKutavuの角部を用いる。うまくしたもので、それをクルクル回して1枚目の穿孔が終わった時には、2枚目の、その場所に穿つべき穴の輪郭が刻まれている。こうして位置の狂うことなく、綴じ穴は次々と開けられていく。

穴の位置や数は、葉の長さによって決まるとされるが、規定はないらしい。二穴の時は、両方に紐を通すという。

写本の場合は、前後に板表紙が付される。同研究所では、前表紙の上に、ことさら1枚のヤシの葉を添え、書名やメモの書かれることが多い。

また、厚手の写本などには、細い竹の棒をstick

(スティック)として兼用することがある。リーフを安定させるのに便宜がある。タイやマンマーにもこの方法が見られる。

筆刻後、適当な平刷毛(ハケ)で葉面にLemongrass oilを塗ることがある。液が多過ぎれば、布巾でふき取る。これは、葉面をクリーニングし、保護し、文字を明瞭に見えるようにする役目を持つ。墨のペーストの役目を兼ねるのだが、写本の補修時などを別とすれば、これも必ず用いるというものではなさそうである。

なお、レモングラス lemongrass は、イネ科オグルカヤ属 *Cymbopogon citratus* の多年草の総称で、特に熱帯地方産の *C. citratus* をいう。広く栽培され、大きな株を作る。葉は、約60センチほどの線形で、この葉、及び、茎を蒸留して lemongrass oil を作る。これは黄色、乃至、褐色を呈しており、主に、⁸⁾ 香水の原料とする。

6 おわりに

南インドのマドラス(Madras)に本部をおく Institute of Asian Studies (アジア文化研究所)における書記素材、写本・文書の作成方法等について述べてきた。ヤシの葉の扱い方、その書き刻む方法などは、主に、Pulavar B. Kannaiyan 氏(65歳、1932年3月17日生)に御教示いただいた(1996年12月10日)。同氏は、子供の時からヤシの葉を用いて字(タミル語)を書いてきた、当初は先生についてこれを学んだ、その先生は、AccountsやDocumentsを書き、Palm leaf bookを作るための仕事をしていた、子供たちにも書くことを教えた、今は、こうした書き物のできる人はまれである、とも述べられた。

書記素材(ヤシの葉、皮革や紙、竹・木、金・石、粘土、その他)とそれらによる写本・文書の作成方法等については、地域(国)や時代を念頭に置いて調査・考察していかなければならない。本稿は、ヤシの葉による場合の一端を覗き見たに過ぎない。関連しては、タイのチェンマイ大学(Chiang Mai University, 1996年8月)、チュラロンコーン大学(Chulalongkorn University, 1997年4月)における調査も報告しなければならないが、紙面の都合があるので、こちらは、後日を期すこととする。

(August 19, 1997)

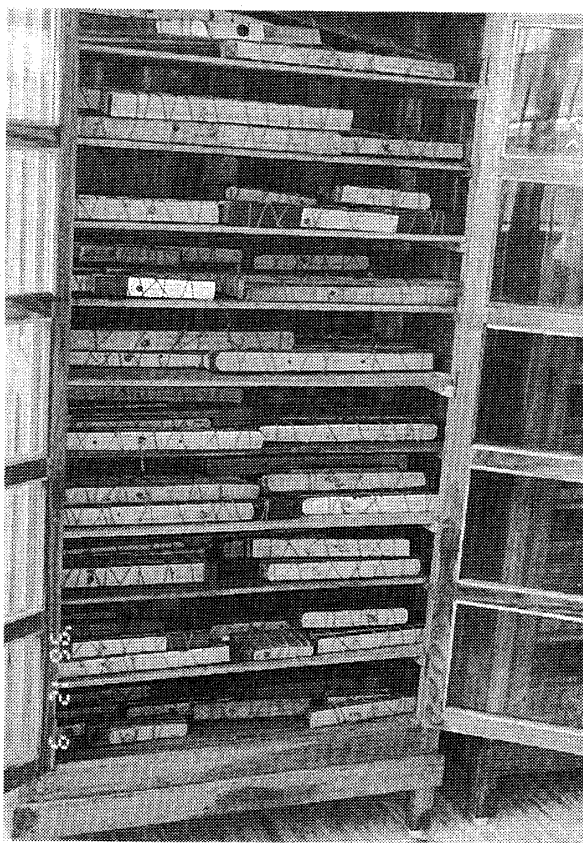
注

- 1) 住所：Chemmancherry, Madras 600 119.
- 2) その一端として、次を参照されたい。
彦坂周博士「全インド貝葉及び古文書文献のセミナーを開催して」、『インド学仏教学研究』、第44巻第1号、1995年12月。
Institute of Asian Studies, General Editors Dr. Shu Hikosaka, Dr. G. John Samuel, *Palm-Leaf and Other Manuscripts in Indian Languages*, August 1996, P.203, and so on.
- 3) Dr. G. John Samuel, “Palm-Leaf Manuscripts in Tamil and Their Preservation”, 注2文献所収, P.203.
Journal of the Institute of Asian Studies, Vol.ⅩⅢ, No.1, P.93, 94.
- 4) ガラス戸付き木製、幅89センチ、高170センチ、足高11センチ。
- 5) Thymol チモールは、ジャコウソウ油などの精油成分の一つで、特異な香気と刺激性の味をもつ無色の結晶。防腐剤・洗浄剤、寄生虫の駆除剤、化粧品などに用いる。
- 6) 拙稿「スリランカのアルヴィハーラ寺における貝葉写本 Palm Leaf Manuscripts の作成方法について」、『島根大学教育学部紀要』、第31巻、1997年12月。
- 7) 拙稿「スリランカにおける貝葉文書・典籍（Palm Leaf Manuscripts）の作成方法について」（『島根大学教育学部紀要』、第28巻、1994年12月）の注5参照。
- 8) 『小学館ランダムハウス英和辞典』、1994年1月、第2版、第1刷、P.1,543, 右。また、『大辞林』、1989年3月、三省堂、等による。

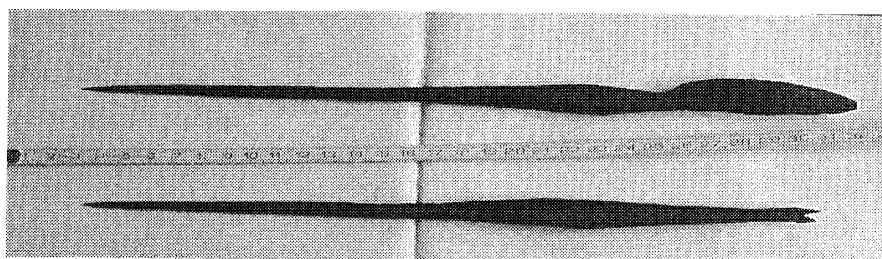
【付 記】

本研究を行うにつき、彦坂周先生・裕見子先生には格別の御指導、御芳情をいただいた。記して御礼申し上げたい。

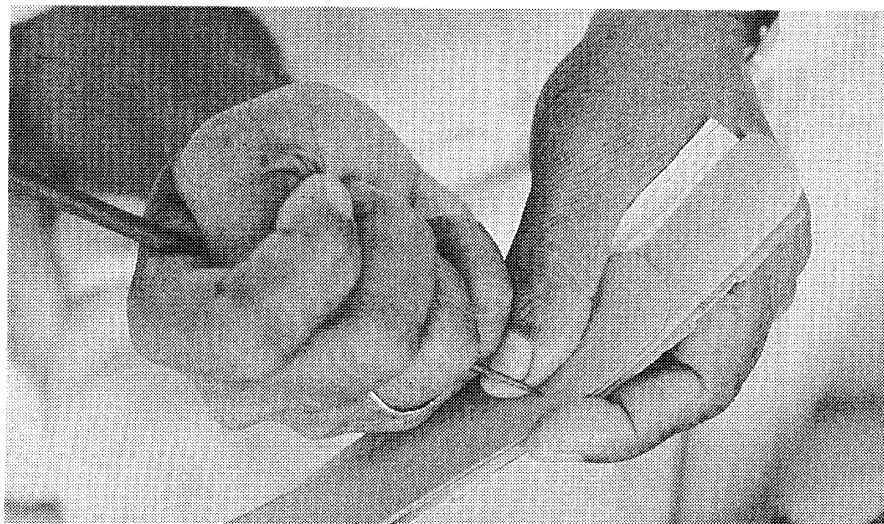
（平成9年10月30日受理）



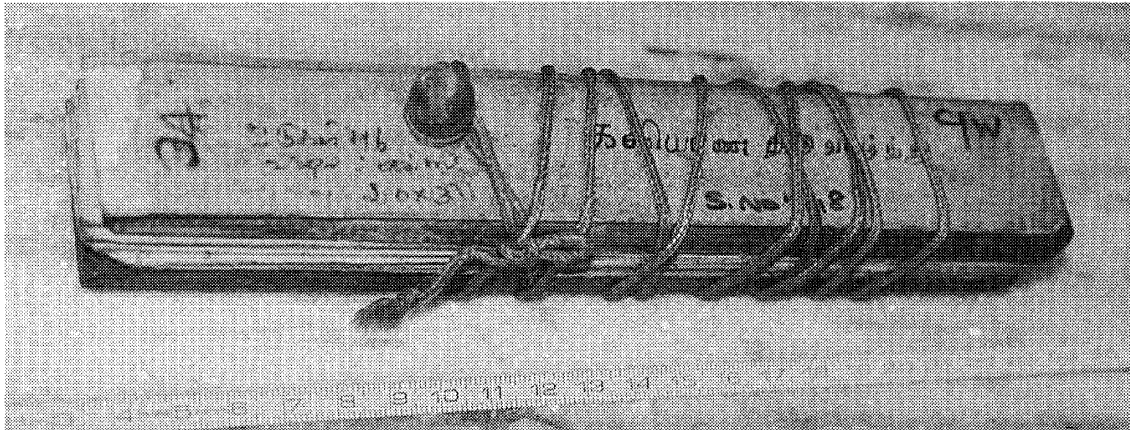
A 書架（注4 参照）



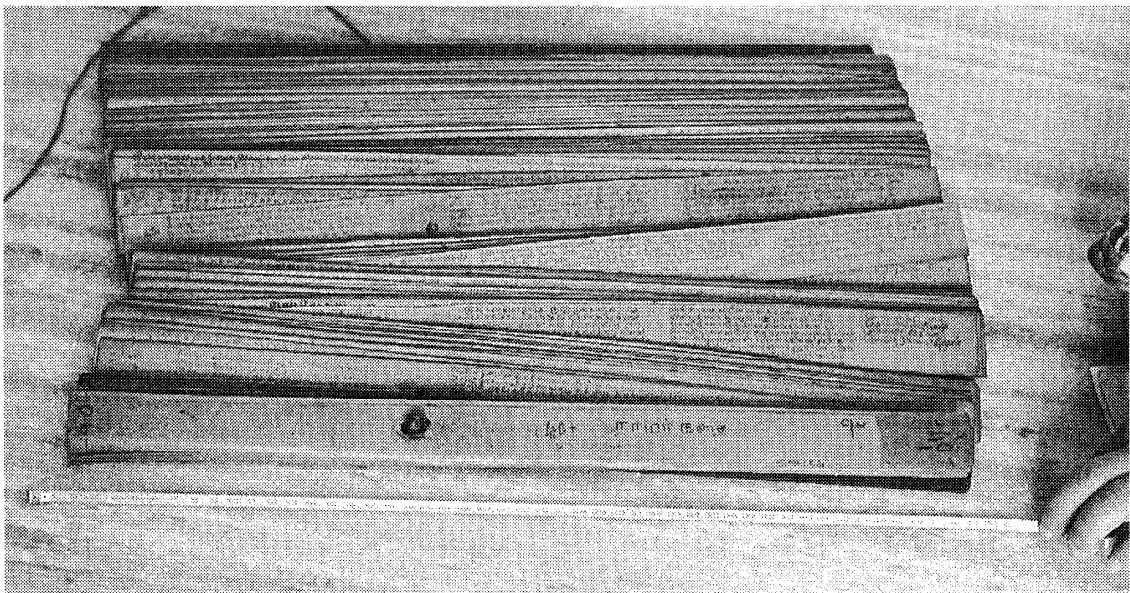
B Stylus 2本, 上は Vār, 下は Kutavu



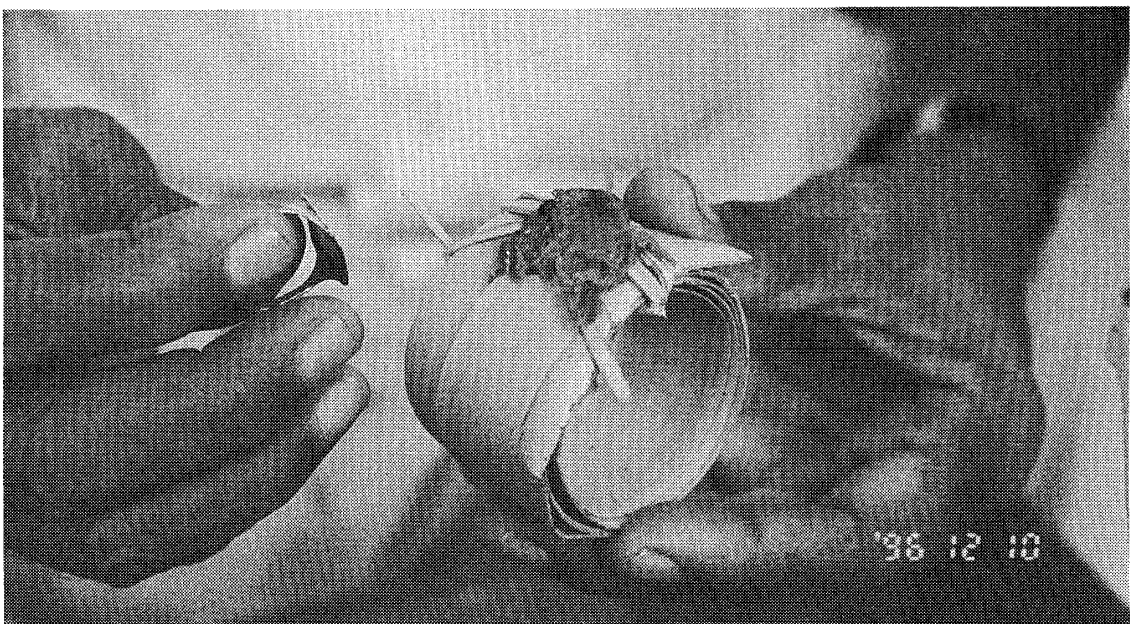
C Stylus で筆刻する



D Palm Leaf Manuscript



E Palm Leaf Manuscript



F Araku と指輪で封印した直後の書簡